

平成24年度 第4回CCC教育学グループ運営委員会 議事概要

I. 日 時：平成24年9月19日（土）14：00-17：30

II. 場 所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者：竹熊委員、三尾委員、難波アドバイザー

（事務局）井端事務局長 森下主幹 松本職員

IV. 検討事項

1. 本日の記録担当者選出。

2. 資料について、事務局より説明があった。

（1）「資料4」は、前回検討した教育学の学士力の考察の背景と全体の解説であると説明があった。前回は、全体の解説のところで終えた。

（2）「資料5」は、前回の部分について、委員より案が提示されているものであると紹介された。

3. 「教育学教育における学士力の考察」

（1）「背景と全体の解説」について

「資料5」に基づき、はじめに委員より修正・加筆の提案があった。学問の説明、“教育”の使命、教育学教育の目標・到達目標という順で構成することを確認した。また、事務局からの提案により教育学分野は対象・応用の多様性、不断の営みである特徴を可能な限り盛り込むこととした。冒頭において、教育学の学問としての説明を追加した文案について了承した。つづいて、教育の重要性と教育学教育の責任を強調するとともに、4つの到達目標について検討を行った。

結論として、以下の案を作成した。

「教育学は、「学び、教える」という人と人との関係、さらには個人と社会との関係の中に存在する学問であるから、人間の発達と学習に関わる事象を考察し、人間理解、社会理解を深めることを通じて人類と地球社会の維持発展を支える人財の育成を使命としている。

教育は、生涯にわたって人間にかかわる現象であり、万人がよりよく生きるための人間形成の営みであるとともに、社会全体を変容させる力を有しており、よりよい社会を実現するための人類共通の財産である。したがって、教育学を学ぶものは、過去の知見を教訓とし、現在の事象を分析的に捉え、未来のあるべき姿を問い続け、理想の実現に向けて行動していく自覚と責任を持たなければならない。

このような背景を踏まえて教育学教育は、教育に関する知識や技術を習得するにとどまらず、その知見を他者に伝え、個人の発達から社会の発展まで主体的に関与する人間の育成を目指さなければならない。

そのためには、教育学の基礎知識と関連諸学問の知見を学び、複眼的な視点に立って自身の学びと教育の重要性を理解し、理論的・客観的に社会の課題を分析して社会の改善や

発展に貢献できる能力を身につけさせることが必要である。

そこで、教育学教育における到達目標として、以下の四点を考察した。

第一に学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に説明できること、第二に実態に応じた学びを教育としてデザインできること、第三に直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができること、第四に教育学を学んだ、者としての責任と義務について、その重要性を自覚できることとした。」

(2) 4つの到達目標それぞれの「解説文」について

「資料5」に基づき、検討した。

- ・【到達目標】 1. 学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に説明できる。

原案では具体的な授業方法を記しているが、それは測定方法の項目に示されているので除くこととし、一方、本到達目標の必要性と重要性を記し、下位の到達度と測定方法の理解につながるように配慮したものにするものとした。以下3つの到達目標の解説文においてもこの方針で作成することとした。その結果、以下ようになった。

「ここでは、教育が個人の理解と社会の理解を形成する上で重要な営みであることを認識し、生涯にわたって教育が果たす役割を論理的、批判的に分析し、他者に説明できなければならない。そのために、教育学の理論や歴史、実践を踏まえて、家庭・学校・地域・職場でのさまざまな教育的課題を題材にして教育の可能性と限界を考察させる。」

- ・【到達目標】 2. 実態に応じた学びを教育としてデザイン（設計、実施、評価、改善）できる。

本分野において分析と過程の重要性を強調することとし、以下ようになった。

「ここでは、学修者の意欲・能力を発揮させるために、教育と学びの現場においてその実態を正確に把握し、目的に応じたより適切な方法・手段を追求できなければならない。そのためには、学びの過程の分析やシミュレーションを通じて、PDCAサイクルを用いた教育システムを構築する力が求められる。」

- ・【到達目標】 3. 直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができる。

具体的な授業方法が目的とならないよう留意し、本到達目標で重視する学習者自身の経験と積極性を強調するように改め、以下ようになった。

「ここでは、学習者自身が、変動する社会に常に関心を持ち、個人及び社会に現出しているさまざまな問題を教育という側面から捉えて、問題解決にどのように貢献できるかを考察できなければならない。そのためには、教育の現場に立脚した実践的経験や他の学問分野の知見をも含め、より広い視点から現実の教育課題を分析し、解決策を提案させる必要がある。」

- ・【到達目標】 4. 教育学を学んだ者としての責任と義務について、その重要性を自覚できる。

原案に加えて、教育が社会や個人に及ぼす影響と自身”学び続ける”こと、主体的に社会に関与することを重視し、結果として、以下ようになった。

「ここでは、教育が次世代にわたって個人や社会に影響を及ぼすことに鑑み、教育学を

学んだ者としてよりよい未来の創造に積極的に関与する態度を身に付けさせねばならない。そのためには、自ら学び続ける中で省察し、さまざまな場面で教育の重要性を伝え、個人の発達から社会の発展まで主体的に関与できるようにする。」

4. 「教育学の授業改善モデル」の図化

「資料6 教育学の授業改善モデルの図」について委員より説明があった。他分野の作成中の図を参照しつつ検討した。

事務局より、具体的にどのように変わるのかを強調する、図中の用語は各教育改善モデルのICTを活用した学修内容・方法、学修環境を用いるとの提案があった。それらの意見をもとに2つの授業改善モデルの図を改訂し、電子メールで検討することとした。

以上